

詩編 第62篇 1節

「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。」

慌ただしい生活では、電車が数分遅延するだけでなにか損したような気分になる。届くはずの物が予定通りに到着しないと約束がちがうのではと焦ることになる。物事が思い通りにゆかないとストレスがつくる。多忙な都会生活は時の豊かさ、味わいを素通りさせてしまいがちだ。すべて止め、待つことはあまりない。

「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。」この歌が歌われたのは都市であったか農村であったかわからない。多分、都での歌だろう。それでも、黙って、待つ者がいる。黙って待つべきお方、神がおられることを確信しての備えである。このお方のみを待つ姿勢である。このお方には救いがある。だから、どこにおいても、どのようなことにあっても待つ者に必ず救いが来る。救われる。

ベランダの薔薇が咲き始めた。一つの枝から三つの蕾が現れた。それぞれが咲く日を待っている。一挙に咲くのではない。それぞれのタイミングで咲き始める。最初に真ん中の薔薇が咲き誇る。次に咲く花は左右のどちらかとなる。未だ咲かないが、陽を浴びて待つ。